〔結　論〕

（1） 川崎病罹患学童の検診システムを確立した。

（2） 試作した検診システムを用いて検診したところ140,000人中，2名の冠動脈後遺症児の他，左心室機能不全例3例の計5例を発見した。

（3） 最近では，全国的にこの検診システムが使用され，成果を上げている。

（4） 今後，このような検診で発見された児の管理の方針を決める必要がある。

フロベンの使用経験

東京女子医科大学第2病院小児科　草川三治
浅井利夫
木口博之

〔目　的〕

川崎病の治療剤として，アスピリンが広く用いられていることは，周知のことである。しかし，アスピリンを用いると急性死の防止には効果があるようだが冠動脈瘤の発生は完全に防止し得ない上，大量のアスピリンを用いると，しばしば肝障害がみられることがある。そこで，アスピリンより一層効果ある，副作用の少ない治療剤を見い出す目的で，フロベンを川崎病児に用いてみた。今回，川崎病のフロベン療法の臨床効果と肝機能を中心とした副作用の検討を行ったので報告する。

〔対象及び方法〕

対象は，東京女子医大第2病院小児科に急性期に入院した川崎病児37例である。性別・年令別分布は表1に示したように，男児24例，女児13例で最年少例は，4カ月児，最年長例は7才10カ月児であった。37例の対象の重

表1　対象の性別・年令別分布

年　令	男　児	女　児	計
4～6ヶ月	2例	1例	3例
7～11ヶ月	5例	2例	7例
1才（代）	6例	4例	10例
2才（代）	4例	2例	6例
3才（代）	3例		3例
4才（代）	1例	2例	3例
5才（代）	1例	1例	2例
6才以上	2例	1例	3例
計	24例	13例	37例

表2　対象のスコア

スコア	症例数	計
0点	3例	28例（76%）
1点	4例	
2点	8例	
3点	4例	
4点	5例	
5点	4例	
6点	5例	7例（19%）
7点	2例	
8点		
9点	1例	2例（5%）
10点		
11点		
12点	1例	
計	37例	

表3　フロベン使用開始病日

病週と病日		症例数	計
第1病週	第2病日	2例	31例(84%)
	第3病日	1例	
	第4病日	6例	
	第5病日	8例	
	第6病日	7例	
	第7病日	7例	
第2病週	第8病日	2例	5例(14%)
	第9病日	2例	
	第10病日	1例	
	第11病日		
	第12病日		
	第13病日		
	第14病日		
第3病週		1例	1例(2%)
計		37例	

症度をみる目的でスコアをつけると表2に示したように37例中28例（76%）が5点以下の低いスコア例で7例（19%）が6～8点の中等度スコア例で，2例（15%）が9点以上の高いスコアであった。

フロベンの使用方法は，入院時より第4病週末まで3mg/kg/日を用い，以後投薬の必要な例では1mg/kg/日を用いた。フロベンの使用開始病日をみると，表3に示したように37例中31例（84%）が第1病週より用い，5例（14%）が第2病週より用い，1例（2%）が第3病週より用いた。最も早い例は第2病日より，最も遅い例は第15病日より用いた。

治療効果，副作用をみる目的で全例に超音波断層心エコー図検査を延105回，平均2.8回/1人行うと同時に肝機能検査を少なくも週1回行った。超音波断層心エコー図検査などで冠動脈瘤後遺症が予想された例，5例に対し冠動脈造影検査を行った。

〔結　果〕

まず始めに副作用特にGOT, GPT（UV法にて測定）

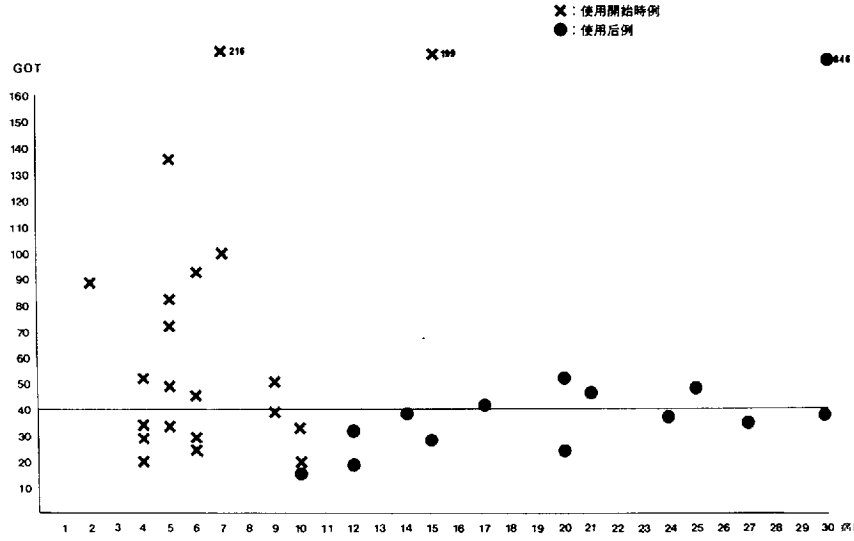

図1　フロベン療法における最高 GOT

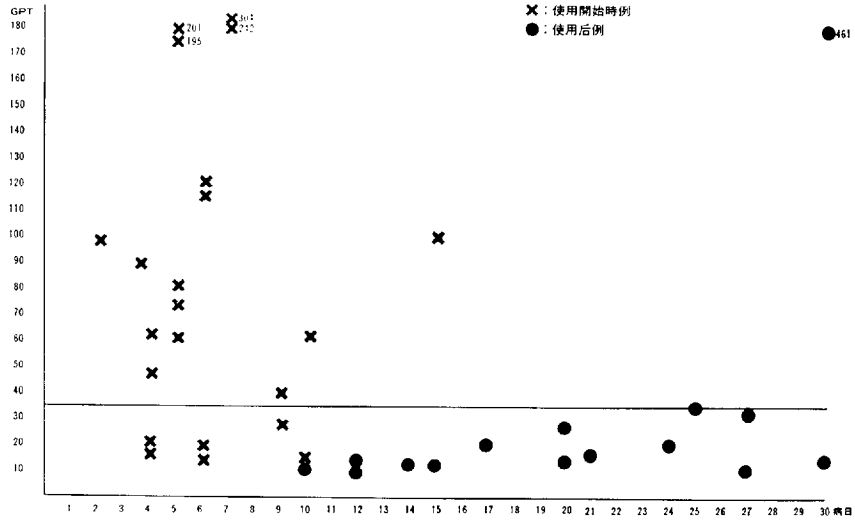

図2　フロベン療法における最高 GPT

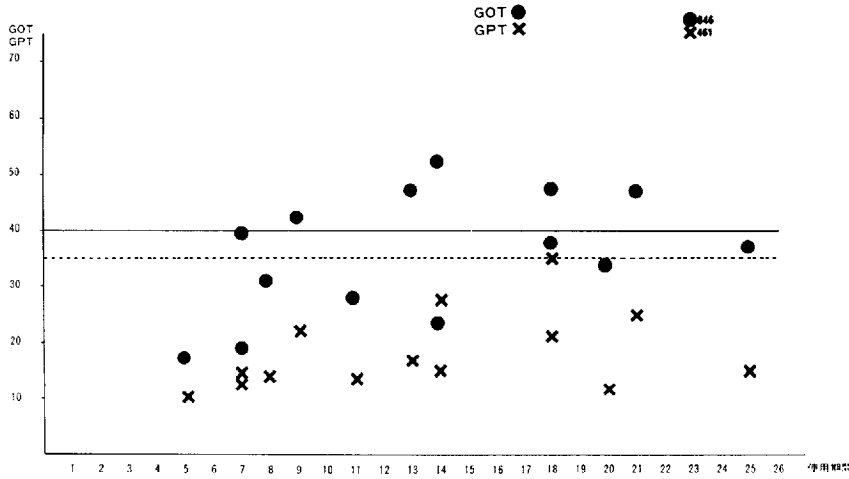

図 3 フロベン使用期間と最高 GOT・GPT

の推移について述べる。対象37例の急性期経過中の最高 GOT を検討してみると，図1に示したように正常値 40KU を越えた例は37例中17例（46%）あった。異常高値を示した17例中12例（71%）は入院時でフロベンを使用する前であり，フロベン使用後には入院時の GOT 以上の高値は示さなかった。17例中5例が，フロベン使用中に最高 GOT 値を示したが，5例中1例は，第30病日に GOT 846KU となった。本例は，経過中に尿路感染症を併発しており，GOT 異常高値がフロベンによるものか，尿路感染症によるものか明らかでない。この異常高値を示した例を除いた4例の最高 GOT は，51KU であった。次に GOT 同様に GPT について検討してみた。結果は図2に示したように，37例中17例（46%）が正常値 35KU 以上の異常高値を示したが，先に述べた尿路感染症併発した1例を除いた全例が入院時であり，フロベン使用後，GOT・GPT の異常高値を示した例について，フロベン使用期間と GOT・GPT 値の関係を検討したところ，図3に示したように一定の傾向はみられなかった。

最後に，川崎病で最も重大な問題である冠動脈瘤後遺症の発生頻度について検討してみた。結果は表4に示したように超音波断層心エコー図検査では，明らかな冠動脈瘤がみられた例は，冠動脈造影検査でも冠動脈瘤を見い出した1例（3%）であり，冠動脈瘤とは断言し得ないが，一過性に冠動脈の拡大のみられた例が7例(19%)あった。冠動脈造影検査を行った5例では，第15病日より治療開始した1例（20%）に冠動脈瘤がみられた。これらの成績はまだまだフロベン療法例の例数が少なかったので確定なことはいえないがステロイド・アスピリン療法と差がなかったと考えている。

表 4 フロベン療法した児の冠動脈造影所見及び超音波断層心エコー図所見

対象総数37例

冠動脈造影所見

実施数 5例 (14%)	<	冠動脈瘤 1例(20%) 正　常 4例(80%)

超音波断層心エコー図所見

実施数 37例 延 105回	<	冠動脈瘤 1例(3%) 拡　大 7例(19%) 正　常 29例(78%)

〔**総括と現時点での結論**〕

1) 川崎病児37例にフロベンを用いた結果，アスピリン療法，特にアスピリン 100mg/kg/日 より肝障害の発生が著しく低かった。さらに，肝障害を示した例でもアスピリン療法に比して程度が軽かった。

2) 冠動脈後遺症の発生頻度については，症例数も少なく断定的なことは結論し得ないがアスピリン療法と比較し，著しく効果があるとはいえなかった。今後，さらに多数例のまとめをする必要があると思われた。

3) 以上からアスピリンと同様に用いてよく，副作用が少ないという利点はある。しかし冠動脈瘤発生についてはそれと予防する効果はあまりアスピリンと変わらず，著明な効果はなかった。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔目的〕

川崎病の治療剤として,アスピリンが広く用いられていることは,周知のことである。しかし,アスピリンを用いると急性死の防止には効果があるようだが冠動脈瘤の発生は完全に防止し得ない上,大量のアスピリンを用いると,しばしば肝障害がみられることがある。そこで,アスピリンより一層効果ある,副作用の少ない治療剤を見い出す目的で,フロベンを川崎病児に用いてみた。今回,川崎病のフロベン療法の臨床効果と肝機能を中心とした副作用の検討を行ったので報告する。